

顕現後第一主日

「わたしはぶどうの木」

イザヤ書5章1―2節

ヨハネ福音書15章1―17節

(1)

ヨハネ福音書には、主イエスが「エゴウ エイミー」といわれた箇所が七か所あります。

- ・わたしは命のパンです。
- ・わたしは世の光です。
- ・わたしは羊の門です。
- ・わたしはよい羊飼いです。
- ・わたしはよみがえりであり、命です。
- ・わたしは道であり真理であり命です。
- ・そして「わたしはまことのブドウの木です」の七カ所です。

「ブドウの木」のたとえは、ほとんどなく牧歌的なイメージがあるかもしれませんが、しかし、ヨハネ15章の後半は、主イエスが十字架に向かう直前に語られた箇所です。

それについても、ひとつして、主イエスは数ある木の中で、あえて「ブドウの木」をお選びになったのでしょうか。

日本本土の代表的な木といえば「桜」です。沖縄の代表的な木は、「琉球松」です。沖縄の那覇あたりに見るヤシの木街道は観光用に植えられたものです。

パレスチナ地方の代表的な木といえば、ヘルモン山のふもとに、威風堂々とそびえ立つ「シバノンの杉」でありまじょう。「シバノンの杉」は、香りが良いので神殿の内張りに

使われております。シバノンの杉は、その枝を四方に広げて、そこから得られた栄養分のすべてを、幹を太らせるために奉仕させているように見えます。

ところが、ブドウの樹ですが、シバノンの杉のイメージとはまるで違います。その幹に目をやる者は、あまりにか細い一本の幹が、身をくねらせながら、棚いっぱい広がる枝を支えながら、枝の先にある多くの房を懸命に支えている姿が目に入ってきます。

主イエスの生涯をイメージする木を選ぶとすれば、やはりシバノンの杉ではありません。

すべてを与えた末、死のほかなにもむくいられなかった主イエスの生涯にふさわしい木とすれば、やはり、「ブドウの木」ではないでしょうか。

(2)

ところで、パレスチナの「ブドウ畑」は、何世代にもわたり先祖から受け継がれてきた大切な財産・嗣業でありました。

列王記上21章には、「アハブ」という王ともあろうお方が、隣りの住人ナボテのブドウ畑があまりに立派であるのを見て、欲しくなり、あらゆる手段を穷して、手に入れようとなりました。しかし、ナボテは断固として断ります。それでも、アハブ王はあきらめず、自分のブドウ畑と交換して欲しいと言い寄るのです。しかし、ナボテはなおも、「わたしは先祖の嗣業をあなたに

とうとうタイトルの「月報」がであります。
ブドウ園のように、四方に枝葉を広げて、実り豊かな教会でありたい、と願うタイトルを「ブドウ園」としたのでしよう。

昨年の日本列島は、悪性「コロナ」を恐れて、多くの人が先々に不安をいただきました。しかし、たゞえ……、つづ、「大空が巻き去られ、地が崩れ去る」などという、とんでもない天変地異が身边に起こるうとも、私たちが、「わたしはまことのブドウの木」と仰せになられたお方に「とびまゐる」「とびまゐり続ける」ことが如何に大切であるかを忘れてはなりません。

「とびまゐり続ける」「なむらひ」「やむらひ」ではありませんが、しかし、くさくさ、必ず、身の回りが豊かになることを多くの者たちが経験してきました。

顧みて、ブドウの木であるキリストに結びついていない時は、どんな実を結んでいったのでしょうか。

「そのころは、それらの罪の中であつて、この世の流れに従ひ、不従順な子らの中であつて、自分の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けねべき子らでした。しかし、罪過の中に死んでいたわたしたちを、キリストとともに生かして、……、あなたに救われたのは、ただ、恵みにあふれています」(H.スピンナー：115)

もうおわかりでしょうか。

豊かな実を結ぶことを願う者に難しいことではありません。」「枝むいてつ

ける」「……」全てではありません。

とびまゐり続けるなら、ぶどう畑の主人さまが、日々、手入れをしてくださる、虫が付けばそれを取り除いてくださる。枝振りが悪ければ剪定(せんてい)してくださる。アツクしと自分で面倒を見る必要があります。ぶどう園の主人さまが、いつさいの面倒を見てくださるのです。

(5)

「とびまゐる」とは、厳密に言えば、「キリスト・イエスの中に」ということになります。

使徒パウロの手紙に、この「エン・トウ・クリストウ」をたびたび目にします。「もはや、わたしが生きているのではなく、キリストがわたしのなかにあって生きておられます」(ガラテヤ2:22)これはパウロの信仰告白です。

ある西欧の有名な神学者は、「クリスチャンとは、15分1度位、せめて、『主よ』という思いを常に抱く……、そういう思いが息づいてくるなら、それがクリスチャンとしての確かなものである」と言ひなさいました。

朝起きてから、……、夕方、……、頭の大半を占めていることは、「仕事」のことであり、「何を食べるか、何を着るか」であり、「わが子の」ことであるかもしれない。

15分1度は無理としても、せめて、一日1度なら、回響(こたへ)していただくこともあつて、一日1度、一日1度でも

いらのです。せめて、一日に一回は聖書を開く。パロパロでもよい。とにかく聖書を開く、その癖を付けよ。多くをもとめさせよ。せめて一日、五分で十分なのです。一人神の御前に静まり祈る、食前の祈りだけでよいことはならないのです。

周東のそみキリスト教会のみなさんが、せめて一日、五分でも、神の御前にひざまずいて祈るならば、この教会に、リバイバルが起きると信じています。くむらようですが、せめて、一日一回は聖書を開き、一日の分は主の御前に祈ることを身に付けていただきたいのです。一日を終えるにあたって、ヤシヤシと不平とつぶやきだけの毎日で終わってはならないのです。

こうした習慣が身に付けば、次第に、身辺に「豊かな実」を結びはじめます。それは、わたしのうちこいます聖霊の働きます。

ガラテヤ書5章22節では、御霊の結ぶ実は、「愛・喜び・平和・寛容・慈愛・善意・忠実・柔和・自制」とあります。それに反して、以前、わたしたちの結んでいたのは「不品行・汚れ・好色・偶像礼拝・まじない・敵意・争い・そねみ・泥酔・宴楽・およびそのたぐい」という野ブドウの実ではなかったでしょうか。

キリストを信じる者が、生涯豊かになることが願われて、あらかじめ用意されていくのが、「聖餐式」ではないでしょうか。

聖餐式において、「パン」と「ブドウ酒」の二品をただくという「聖餐」

尻込みすることがあったかもしれませぬ。それでも、食卓から落ちるパンくずのひとかけらをいただくにふさわしからぬ者であることを覚えながら、深く心に留めて、二品をいただいてきました。

「わたしの肉を食べ、わたしの血をのむものは、わたしにとどまり、わたしもまた、その人にとどまります」(ヨハネ福音書6:56)―、この御言を宗教改革者たちの多くが、聖餐と結び付けて解釈してきました。礼拝において御言葉を聴き、共に聖餐にあずかり共にキリストの中にとどまり続けてきたことが、わたしたちを今日にまで至らしめたのではないのでしょうか。

へブル人の手紙10章25節に、「あの人たちがいつもしているように、集会をやめることをしないで、互いに励まし、かの日が近づいているのを見えますます、そうしようではないか」との勧めがなされています。何故、わざわざ、そのような勧めがなされているのかといえば、集会をやめれば、キリストにとどまらなくなることではないでしょうか。

ブドウの木にとどまらない枝は、枯れて、外に投げ捨てられ、人々はそれを集めて、火に投げ入れて、燃やされて無用な枝となります。

主イエスは、「わたしからはなれては、あなたがたは何一つできません」と言い切りました。しかし、果たして私たちは、「これを」アメン」と受け止めているでしょうか。それとも、「何一つできません」とは、とんでもないこと

り続ける「ものなをいじめんくだわら
ますようじ」。キリスト・イエスの名に
より祈ります。「アーメン」。

受け止めることなのではないか。
キリストと結びつき、つながっていないな
ければ何もできなからと井で言われて
いる、わたしたちがうつって致命的なこ
とがうえば、それは、「互いに愛しあ
う」とうたいひます。

「わたしがあなたがたを愛したよう
に、あなたがたも互いに愛し合おう」と、
これがわたしの戒めです(1-2)と
あります。

実際、わたしたちは、キリストから
離れて互いに愛し合おうとすることができ
なると、もし思いつくならなり、それは
夢や幻想にすぎません。

「互いに愛し合えます」と言える人
は、自らの罪深さが十分分かっていな
いのではないでしょうが。

「キリストはブドウの木」であり、「わ
たしはその枝」である関係を、いま一
度、まじめに見直さねばなりません。
周東のぞみキリスト教会は、この地に
開拓してから50数年を経ています。
こうまで数々の実りの豊かさを与えら
れたのは、日々、ブドウの木の枝とい
てとどまり続けてきたからではない
でしょうか。それはまた、キリストが
枝葉を大きく広げて、この群れに豊か
な命を注いでくれたからであります。

主イエスは、「まいじのブドウの木」
として、今も恵みと愛とを注いでお
られるお方ははなごころでしょうか。

【祈ります】

父なる神さま、今年一年、つかつか
キリストに結びつく枝として、何時
如何なる時も、「よめい・しなが